

柔道の受け身に対するイメージ調査の検討

—平成24年度中学校武道必修化にむけて—

扇塚 愛* 鈴木祥子* 中島 隼* 藤田主一** 吉川和利*** 森脇保彦*

(*国土館大学 **日本体育大学 ***電気通信大学)

Examination of image research to Ukemi of judo

— The junior high school Budo requiring in 2012 —

A.Ohgizuka* S.Suzuki* T.Nakajima* S.Fujita** K.Kiikawa*** Y.Moriwaki*

(*Kokushikan University **Nippon Sport Science University

***The University of Electro Communications)

Abstract

It was announced that the junior high school course of study was revised, and "Budo" was changed from the optional subject to the required subject by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology on March 28, 2008.

Transition measures of various places and each school are taken in April, 2009, and all aspects are executed as a required subject in April, 2012 though "Budo" has been taken to the class as one of the optional subjects in the health and physical education of the junior high school now.

As these measures, when it begins to move to the improvement of the budo leadership, the each administrative division's board of education is going out as the Budo course is held as measures of budo leader shortage in the feared health physical education department for a budo unprofessional teacher with a scarce budo experience.

Physical education leader guidance object do person image grasp visual concise display content observation the utility value large.

It is now to research the image to passive of junior high school student's judo by this research, and to obtain the one that becomes the basic material.

It can be expected to contribute to the judo class execution in the following junior high school budo requiring.

I. Introduction

II. Purpose

- III. Method
- IV. Results
- V. Discussion
- VII. Conclusions

I. 緒言(Introduction)

日本に初めて運動(体育)を行う習慣が入って来たのは明治維新後、お雇い外国人により西洋医学の自然環境を医療に応用する学校衛生学(1893)という分野において運動いわゆる体育を行うことによって健康な精神と肉体を創ることから日本においても行われるようになった。

しかし我が国固有の伝統文化の一つである武道においては、1878年(明治11)に体操伝習所が設立され体操代用の価値はあるという程度であり採用はされなかったが、しかし1898年(明治31)頃には文部省が課外での実施を公認した。

その後、日清(1894~5)・日露戦争(1904~5)の勝利の影響を受け急激に国粹主義の気運が高まり、京都に大日本武徳会(1895)が創立され学校体操教授要目(1913年)においても男子中等学校体操科で「体操」と剣道と柔道からなる「武道」に大別され同じような競技ではあるが、日本武道と西洋競技とは峻別された。

敗戦後、1950年(昭和25)文部省は、GHQの了解を得てスポーツとして学校体育の格技の中に剣道・柔道の復活を認めた。さらに1989年(平成元)には「格技」を「武道」と名を改め、「武技、武術などから発生した我が国固有の文化」であることを強調した。

1882年(明治15)柔道は、嘉納治五郎師範によって日本固有の伝統武術であった柔術を道に生かし柔道と名付け日本傳講道館柔道を興した。柔術はもともと武士による武術であり、人を殺傷する術であったが嘉納自身の体験から精神的・身体的・技術的いわゆる「心」「技」「体」により人間にとって最も有効な精神・身体運動であると考え、次の言葉で言い現わしている。すなわち「精力最善活用」「相助相譲」「自他融和共栄」の精神を持って柔道とし世界共有の文化とし現在、世界200ヶ国(IJF:世界柔道連盟加盟国数)に広まり1964年(昭和39)にはオリンピックの競技種目にまで普及発展した。

文部科学省が1980年(昭和55)から始まった「ゆとり教育」の後、2008年(平成20)の中学校学習指導要領の改訂により2013年(平成24)度より中学校武道・ダンスの必修化に伴い急速に各団体連盟(柔道・剣道・相撲)において学習指導要領の見直しや検討に取り組んでいる状況の中で、柔道の基本となる「受け身」について詩人の相田みつをが次のような詩で表現している。

－負ける練習(受け身・負ける練習)－

「柔道の基本は受け身、受け身とはころぶ練習、負ける練習、人の前にぶざまに恥をさらす稽古、受け身が身につけば達人、負けることの尊さがわかるから。」(相田みつを：「一生感動一生青春」p70.1990)

柔道の受け身は、投げられたときにケガをしないように身体を守る技術である。受け身は、柔道初心者が柔道を習い始める時に、安全の確保のため最初に習得する必要があるといえる。また、本村ら¹⁾が受け身を練習する効果について「投げられることに不安がなくなり、練習が積極的になり、技術の向上が著しく高まる」と述べているように、受け身を上達することは投げ技の技能向上のためにも効果があると考えられる。このように、柔道において受け身は、重要な基本動作であるといえる。

柔道の受け身には、投げられる方向に応じて、後ろ受け身、横受け身、前受け身、前回り受け身がある。(図-1参照)受け身は、投げられたとき頭を打たないようにし、体幹部への衝撃を和らげ、腕や足に無理な力が加わらないようにする効果があると考えられている。とりわけ、投げられたとき頭を畳に打つと重大な事故につながる恐れがあるため、正しい受け身により頭部を打たないようにすることが重要である。(全国柔道事故被害者の会)

柔道初心者において、尾形ら²⁾が投げられることへの恐怖感や、受け身の痛みから逃避観を持つ生徒が多いことが指摘されている。一方で、柔道の受け身について数多くの研究がなされて来ているが、それらは、森藤ら³⁾、真柄⁴⁾の受け身の衝撃力や性質に関する研究や、真柄ら⁵⁾の受け身の運動構造について運動学的に分析した研究が主であった。また、尾形ら⁶⁾の受け身に対する意識の研究は指導法論的な研究の一環で、対象が指導者であったため、学習者をもつイメージについての研究は見られなかった。

さて、平成20年3月28日、中学校学習指導要領が改訂され、文部科学省により「武道」が選択科目から必修科目に変更されることが発表された。現在、中学校の保健体育では、選択科目のひとつとして「武道」が授業に取り入れられているが、平成21年4月より各地域・学校ごとに移行措置が取られ、平成24年4月から必修科目として全面实施される。この対策として、各都道府県教育委員会は懸念される保健体育科における武道指導者不足の対策として、武道経験の乏しい武道専門外教員を対象に武道講習会を開催するなど、武道指導力の向上に動き始めたところである。

体育指導者が、指導の対象と



図-1 柔道の受け身

する者の持つ、それに対するイメージを把握できるなら、しかも、それを視覚的に簡明に表示し得て、内容が観察できるならば、その利用価値は大きい。本研究では、中学生の柔道の受け身に対するイメージの意識調査を行い、その基礎資料となるものを得ることは、今後の中学校武道必修化における柔道授業実施に貢献されることが期待できる。

II. 目的(Purpose)

本研究は、平成24度から中学校武道必修化に向け、柔道の受身の単元をよりよい授業にするための基礎的資料を得ることを目的とした。

『受け身』という刺激語からイメージされる言葉を引き出す予備調査(20答法:TST)を中学生を対象に行い、その後、抽出された記述語を参考に受け身のイメージに関する調査用紙を作成し、中学生が受身に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにする事を本研究の目的とする。

III. 研究方法(Method)

1. イメージの概念について

スポーツの心理学の領域でイメージという用語がしばしば用いられているが、その語義は広義、狭義に解釈され必ずしも明確であるとは言えない。

リチャードソン(Recharadson)⁷⁾は、イメージを残像、直感像、記憶心像、創造イメージ広範囲に分類している。猪俣ら⁸⁾伊藤ら⁹⁾西田ら¹⁰⁾の研究もこの説に属する。

西田らはその研究でイメージを過去経験(知覚的、感覚的、感情的経験など)によって外界の事物の近くと同類的に経験、保持された情報が自己の記憶の手がかりとしての意識的なレベルで想起、あるいは再生されたもので絵画的な特性を持つと定義している。

さらに鶴原ら¹¹⁾は、今までの研究からイメージの定義を3つの類型に識別し、スポーツ心理では身体運動について意識内容、運動処理プロセスの研究のほとんどがリチャードソンの説に属するとし、身体運動の意識内容をさす場合、イメージを過去の運動経験によって蓄えられた視覚的、感覚的、体制感覚的その他の感覚記憶から生じている身体運動についての準感覚的な体験であり、ある身体運動がそなえている一定の時間的連続をもったものであると定義している。

本研究は、「受け身に対するイメージ」をとらえようとするものであり、リチャードソンの説に従う。

2. 調査方法および質問用紙の作成

(1)調査対象者

調査対象者は中学1年生から中学3年生までの、総数354名であった。

- ①経験者(267名：男子177名、女子90名)
- ・柔道部または道場に所属している経験者(143名)
 - ・授業で行う程度の経験者(119名)
 - ・未回答(5名)
- ②非経験者(87名：男子62名、女子25名)
- ・周りに柔道経験者がいる者(78名)
 - ・周りに柔道経験者がいない者(9名)

(2)調査方法

質問紙は、20答法(Twenty Statements Test: TST)の方法を採用した。「受け身」という刺激語を縦に13個並べ、「あなたの柔道の受け身に対するイメージを書いてください」、また自由記述終了後に「あなたが書いた文章の中で、一番イメージが強い文章に○印をつけてください」と教示し、予備調査を実施した。(表-1)

この調査で採用したTSTは、書きかけの単語を調査対象者に与え、その後をつづけて、文章を完成させる形式のテストである。これは1954年にアメリカの心理学者Kuhn,M.H.とMcparlandによって開発され、1人の調査対象者から多様な反応を得られるという利点がある。そのため、社会学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学など様々な場面で活用されている。

表-1 予備調査

柔道の受け身に対する意識調査	
国士舘大学体育学部武道学科 4年 扇塚 愛・鈴木祥子 指導教授 森脇保彦	
1) 下記の質問に該当するものに○を付けてください。	
性別	男 ・ 女
学年	_____年
柔道歴	_____経験者 ・ 非経験者
頻度(経験者のみ回答)	_____柔道部または道場に所属(____年) ・ 授業で行う程度
環境(非経験者のみ回答)	_____周りに柔道経験者が _____いる ・ いない
知識(全員回答)	_____柔道の受け身を _____知っている ・ 知らない
2) あなたが持っている柔道の受け身に対するイメージを書いてもらいます。下に書きかけの文章があるので、例のようにあとを自由に続けて書き込んでください。あまり考えすぎないように頭に思い浮かんだことをできるだけ多く書き込んでください。また、あなたが書いた文章の中で、一番イメージが強い文章に○印をつけてください。	

1. 受け身は_____
2. 受け身は_____
3. 受け身は_____
4. 受け身は_____
5. 受け身は_____
6. 受け身は_____
7. 受け身は_____
8. 受け身は_____
9. 受け身は_____
10. 受け身は_____
11. 受け身は_____
12. 受け身は_____
13. 受け身は_____

(3)データ分析および質問項目の作成

334名について、予備調査を実施した結果990の記述語が抽出された（平均2.8個）。それらを用いてデータ分析を行い、KJ法（川喜田,1967）を用いて、類似していると思われる言葉を結びつけて92項目に絞り、A～Fの6つのカテゴリーに分類した。それをさらに頻度の高い項目から選定し、92項目から30項目に絞り、質問項目を作成した。（表-2）

質問項目は、(A)身体的効果(4項目)、(B)体力的効果(3項目)、(C)日常的效果(4項目)、(D)受け身の位置付け(8項目)、(E)心理的效果(9項目)、(F)その他(2項目)の6つのカテゴリーに分類されており、次のような項目である。

A. [身体的効果] 受け身によって発揮される人間の本能的行動に関する記述。(4項目)

(1)受け身は体を守る。(8)受け身はケガを防ぐもの。(15)受け身は衝撃を和らげる。(23)受け身は命を守る。

B. [体力的効果] 受け身において自身の体力に及ぼす影響に関する記述。(3項目)

(2)受け身は首を強くする。(20)受け身は目が回る。(24)受け身は自然に体が動

くようになる。

C. [日常的効果] 日常生活における受け身の便宜性に関する記述。(4項目)

(3)受け身は転んだときに使える。(9)受け身は事故にあったときに使える。(16)受け身は身に付けておくと便利。(25)受け身は普段の生活の中でも使える。

D. [受け身の位置付け] 柔道における受け身の位置付け。(8項目)

(4)受け身は基本動作である。(6)受け身は準備運動であることの一つである。(10)受け身はなくてはならない動作。(12)受け身はたくさん種類がある。(17)受け身は相手の技をきれいに見せるもの。(19)受け身は練習したら上手くなる。(26)受け身はできていないと危険。(29)受け身は柔道が強くなるための一歩。

E. [心理的効果] 受け身によって得られるメンタル的要素に関する記述。(8項目)

(5)受け身は痛そう。(7)受け身は怖い。(11)受け身はストレス解消になる。(13)受け身は恥ずかしい。(18)受け身は難しい。(21)受け身は楽しい。(27)受け身は美しい・きれい(28)受け身はいざというときに使えるか不安。(30)受け身はカッコいい。

F. [その他] (2項目)

(14)受け身は自分がどうやってとっているのか分からない。(22)受け身はコツをつかめばすぐできる。

計30項目で成り立っており、質問用紙ではそれらの項目をランダムに配置し、それぞれの項目について5件法評価尺度法によって調査を行った。(表-2)

表-2 質問項目(30項目)

柔道の受け身に関するイメージ調査	
国士館大学体育学部武道学科 4年 扇塚 愛 鈴木祥子 指導教員 森脇保彦	
3) 下記の質問に該当するものに○を付けてください。	
性別	男 ・ 女
学年	_____年
柔道歴	_____経験者 ・ 非経験者

頻度（経験者のみ回答） 柔道部または道場に所属（ 年） ・ 授業で行う程度
 環境（非経験者のみ回答） 周りに柔道経験者が いる ・ いない
 知識（全員回答） 柔道の受け身を 知っている ・ 知らない

4) 以下の項目は、柔道の受身について記述したものです。あなたにとってどのくらい適切だと思いますか？

「非常にそう思う」から「ぜんぜん思わない」までの中から数字を選んで○印を付けてください。

1 2 3 4 5
 ぜんぜん思わない あまりそう思わない どちらでもない やや思う 非常にそう思う

- | | | | | | |
|------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 受け身は体を守る | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 受け身は首を強くする | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 受け身は転んだときに使える | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 受け身は基本的動作である | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 受け身は痛そう | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 受け身は準備運動ですることのひとつである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. 受け身は怖い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 受け身はけがを防ぐもの | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. 受け身は事故にあったときに使える | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 受け身はなくてはならない動作 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. 受け身はストレス解消になる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 12. 受け身はたくさん種類がある | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 13. 受け身は恥ずかしい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 14. 受け身は自分がどうやってとっているのか分からない | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 15. 受け身は衝撃を和らげる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 16. 受け身は身に付けておくと便利 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 17. 受け身は相手の技をきれいに見せるもの | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 18. 受け身は難しい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

19. 受け身は練習したら上手くなる	1	2	3	4	5
20. 受け身は目がまわる	1	2	3	4	5
21. 受け身は楽しい	1	2	3	4	5
22. 受け身はコツをつかめばすぐできる	1	2	3	4	5
23. 受け身は命を守る	1	2	3	4	5
24. 受け身は自然に体が動くようになる	1	2	3	4	5
25. 受け身は普段の生活の中でも使える	1	2	3	4	5
26. 受け身はできていないと（知っていないと）危険	1	2	3	4	5
27. 受け身は美しい・きれい	1	2	3	4	5
28. 受け身はいざというときに使えるか不安	1	2	3	4	5
29. 受け身は柔道が強くなるための一歩	1	2	3	4	5
30. 受け身はカッコいい	1	2	3	4	5

3. 調査対象者

本研究の調査対象者は中学1年生から中学3年生までの、総数124名であった。

①経験者(94名：男子61名、女子33名)

- ・柔道部または道場に所属している調査対象者(3名)
- ・授業で行う程度の調査対象者(91名)

②非経験者(26名：男子23名、女子3名)

- ・周りに柔道経験者がいる調査対象者(17名)
- ・周りに柔道経験者がいない調査対象者(9名)

③未回答者(4名)

4. 調査方法

東京都内の2つの中学校に調査を依頼し、中学1年生から中学3年生の教室で調査用紙を配布して同意を得た後に実施した。

5. 分析方法

本研究では、受け身に対するイメージの構造を統計的立場から推定するための方法

として因子分析法を用いることにする。ここで本研究で用いた因子分析法について述べることにする。

因子分析 (factor analysis) は、1900年代の初めから心理学における統計的手法として発達し、その後医学、生理学、社会学、教育学等々、広範囲の分野において応用されている。そしてその根本的な思想は、“ある領域での一件複雑にみえる種々の現象も、極めて少数の潜在的因子 (latent factors) によって説明し得る” という、科学の根底に横たわる簡素 (parsimonny) の原則に基づいている。(奥野ら¹²⁾)

因子分析について Comrey, A.L (1980) は、その著書の中で「多数の変量について相関行列が大きな値の相関係数を持っているということは、その中にある変量が相当に強く関連していることを示している。

変量が多くその間に多数の高い相関があるときは、さまざまな相互関係のあることが予想されるが、これをそのまま同時に考慮して考察することは非常に困難である。このような場合、因子分析は相関行列に見られる数値を説明するために潜在的な因子の存在を仮定したり、或いは因子という名の構造物を想定し、このような複雑な相互関係をできるだけ簡単な形で捉える手段を提供するものである」と述べている。

また、松浦¹³⁾ は「ある種の能力を測定する諸テスト変数は、テスト結果として測定された成果にはいくつかのより単純な能力領域が関与していると考えられる場合が多い。この単純な能力領域を各テスト変数の関連 (相関係数、または共分散) を手がかりとして見つけていく統計的方法の一つが因子分析法といわれるものである」と述べている。

因子分析にはその方法として実際に二因子解法、二重因子解法、セントロイド解法、主成分解法、主因子解法、多因子解法、多群子解法等の様々な方法がある。

非常にそう思う	5
やや思う	4
どちらでもない	3
あまりそう思わない	2
ぜんぜん思わない	1

として調査内容を得点化し、得られた結果について平均値、標準偏差、相関行列 (30 × 30) を計算し、主因子法 (principal factor solution) を施し、固有値1.0以上の主成分についてノーマル・バリマックス (nomal varimax) 基準による直行回転を適用して計算を行った。なお相関行列を算出するにあたり、その過程において平均値、標準偏差を算出した。

表-3 記述統計(平均値と標準偏差) N = 124

項目	平均値	標準偏差
1	4.2203	.97958
2	2.8644	1.13164
3	3.2627	1.36769
4	3.8983	1.10469
5	3.2797	1.30014
6	2.8898	1.11542
7	2.8898	1.33195
8	4.0508	1.10822
9	2.7797	1.29520
10	3.3644	1.25177
11	1.8729	.99182
12	3.6864	1.01862
13	2.2034	1.12135
14	3.1610	1.25385
15	3.7458	1.03928

項目	平均値	標準偏差
16	3.6610	1.25555
17	2.8475	1.15933
18	3.3814	1.13920
19	4.1186	.74156
20	2.5339	1.21023
21	2.6356	1.15222
22	3.3475	1.15749
23	3.4661	1.23816
24	3.0847	1.10613
25	2.4322	1.12834
26	3.0763	1.28207
27	2.6356	1.00141
28	3.5424	1.20287
29	3.8729	1.10590
30	2.7627	1.21724

IV. 結果(Results)

1. 項目ごとの得点の平均値と標準偏差

全体124名から得られたデータを項目ごとに得点化し、30項目の平均値と標準偏差を算出し、表3に示した。その結果、最も肯定された項目は(1)受け身は体を守る(平均値=4.22、標準偏差=0.98)である。反対に、最も同意されなかった項目は(11)受け身はストレス解消になる(平均値=1.87、標準偏差=0.99)である。以下、得点順に並べると次の通りである。

得点の高い順以下4項目

- (19) 受け身は練習したら上手くなる。(平均値=4.12、標準偏差=0.74)
- (8) 受け身はけがを防ぐもの。(平均値=4.10、標準偏差=1.19)
- (4) 受け身は基本動作である。(平均値=3.90、標準偏差=1.10)
- (29) 受け身は柔道が強くなるための一歩。(平均値=3.87、標準偏差=1.11)

得点の低い順以下5項目

- (13) 受け身は恥ずかしい。(平均値=2.20、標準偏差=1.12)
- (25) 受け身は普段の生活の中でも使える。(平均値=2.43、標準偏差=1.13)
- (20) 受け身は目が回る。(平均値=2.53、標準偏差=1.21)
- (21) 受け身は楽しい。(平均値=2.64、標準偏差=1.15)
- (27) 受け身は美しい、きれい。(平均値=2.63、標準偏差=1.00)

*21と27の平均値は同得点であった。

2. 柔道の受け身に対するイメージの構造

調査対象者全体の124名について、得られたデータすべてを得点化した結果、表4-1の抽出された回転後の因子負荷行列にみられるように9因子が抽出され、第1因子から第9因子までの全分散に対する累積貢献度は67.250%であった。ここでは因子負荷量0.45以上を解釈のための基準とした。表-4は相関行列(30×30)である。

また、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.788$ という意味ある数値が得られた。(信頼性が78.8%と高い数値が得られたこと。)

第1因子

第1因子の全分散に対する貢献度は13.098%であり、因子負荷量が0.45以上のものの項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると

- (9) 受け身は事故にあったときに使える。(0.821)

- (25) 受け身は普段の生活の中でも使える。(0.803)
- (3) 受け身は転んだときに使える。(0.692)
- (16) 受け身は身に付けておくと便利。(0.610)
- (24) 受け身は自然に体が動くようになる(0.578)
- (23) 受け身は命を守る。(0.575)
- (26) 受け身はできていないと危険(0.534)

の7項目が抽出された。(9) 日常的効果、(25) 日常的効果、(3) 日常的効果、(16) 日常的効果、(24) 体力的効果、(23) 身体的効果、(26) 受け身の位置づけに関する項目が抽出された。上位4つが受け身は日常生活の中で必要性が高いことを示しているので、『日常的効果因子』と解釈した。

第2因子

第2因子の全分散に対する貢献度は9.047%であり、有意の項目を列挙すると

- (21) 受け身は楽しい。(0.704)
- (27) 受け身は美しい・きれい。(0.703)
- (17) 受け身は相手の技をきれいに見せるもの。(0.702)
- (30) 受け身はかっこいい。(0.6800)

の4項目が抽出された。(21) 心理的効果、(27) 心理的効果、(17) 受身の位置づけ、(30) 心理的効果に関する項目が抽出された。4項目中3項目が、受け身が及ぼす心理へのプラス効果を示しているので、『心理的プラス効果因子』と解釈した。

第3因子

第3因子の全分散に対する貢献度は8.839%であり、有意の項目を列挙すると

- (7) 受け身は怖い。(0.807)
- (5) 受け身は痛そう。(0.776)
- (18) 受け身は難しい。(0.612)
- (14) 受け身は自分がどうやってとっているのか分からない。(0.514)
- (13) 受け身は恥ずかしい。(0.452)

の5項目が抽出された。(7) 心理的効果、(5) 心理的効果、(18) 心理的効果、(14) その他、(13) 心理的効果に関する項目が抽出された。5項目中4項目が、受け身が及ぼす心理へのマイナス効果を示しているので、『心理的マイナス効果因子』と解釈した。

第4因子

第4因子の全分散に対する貢献度は8.408%であり、有意の項目を列挙すると

- (15) 受け身は衝撃を和らげる。(0.706)
- (8) 受け身は怪我を防ぐもの。(0.672)
- (28) 受け身はいざというときに使えるか不安。(0.577)
- (1) 受け身は体を守る。(0.532)

の4項目が抽出された。(15) 身体的効果、(8) 身体的効果、(28) 心理的効果、(1) 身体的効果に関する項目が抽出されたが、ここでは4項目とも、体を守ることに関係が深い因子であると思われるので、『身体的効果因子』と解釈した。

第5因子

第5因子の全分散に対する貢献度は6.302%であり、有意の項目を列挙すると

- (20) 受け身は目がまわる。(−0.791)
- (22) 受け身はコツをつかめばすぐできる。(0.689)
- (19) 受け身は練習したら上手くなる。(0.461)

の3項目が抽出された。(20) 体力的効果、(22) その他、(19) 受け身の位置づけに関する項目が抽出された。ここでは、因子負荷量の高い、(20) 受け身は目が回るに注目して『体力的効果因子』と解釈した。

第6因子

第6因子の全分散に対する貢献度は6.028%であり、有意の項目を列挙すると

- (4) 受け身は基本動作である。(0.745)
- (6) 受け身は準備運動ですることの一つである。(0.589)
- (10) 受け身はなくてはならない動作である。(0.472)

の3項目が抽出された。(4) 受け身の位置づけ、(6) 受け身の位置づけ、(10) 受け身の位置づけに関する項目が抽出された。ここでは、抽出された3項目すべてが柔道における受け身の位置づけに関係している因子で、受け身を体得しないことには柔道は出来ないので『基礎的因子』と解釈した。

第7因子

第7因子の全分散に対する貢献度は5.582%であり、有意の項目を列挙すると

- (29) 受け身は柔道が強くなるための一歩。(0.716)

の一つの項目にのみ有意は負荷量を示した。受け身の位置づけに関する項目である。通常、因子の解釈にあたっては、単一の項目からの因子を定義するのは非常に困難であり、かつ正しく解釈されたかどうかについても明確なものではないので、ここでは『解釈不能』とした。

第8因子

第8因子の全分散に対する貢献度は5.078%であり、有意の項目を列挙すると

(2) 受け身は首を強くする。(0.813)

の一つの項目にのみ有意は負荷量を示した。体力的効果に関する項目である。通常、因子の解釈にあたっては、単一の項目からの因子を定義するのは非常に困難であり、かつ正しく解釈されたかどうかについても明確なものではないので、ここでは『解釈不能』とした。

第9因子

第9因子の全分散に対する貢献度は4.867%であり、有意の項目を列挙すると

(12) 受け身はたくさん種類がある。(0.708)

の一つの項目にのみ有意は負荷量を示した。受け身の位置づけに関する項目である。通常、因子の解釈にあたっては、単一の項目からの因子を定義するのは非常に困難であり、かつ正しく解釈されたかどうかについても明確なものではないので、ここでは『解釈不能』とした。

この結果、中学1年生から3年生の柔道に対するイメージの構造は

第1因子 日常生活における受け身の便宜性に関する記述。『日常的效果因子』

(9.25.3.16.24.23.26)

第2因子 受け身によって得られるメンタル的要素に関する記述。『心理的プラス効果因子』(21.27.27.30)

第3因子 受け身によって得られるメンタル的要素に関する記述。『心理的マイナス効果因子』(7.5.18.14.13)

第4因子 受け身によって発揮される人間の本能的行動に関する記述。『身体的効果因子』(15.8.28.1)

第5因子 受け身において自身の体力に及ぼす影響に関する記述。『体力的効果因子』(20. 22.19)

第6因子 柔道における受け身の位置づけに関する記述。『基礎的因子』(4,6,10)

第7因子 『解釈不能』(29)

第8因子 『解釈不能』(2)

第9因子 『解釈不能』(12)

という因子から構成されていた。

表-5 回転後の因子負荷行列 N=124 を挿入

項目\因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子	第9因子	共通性
9、受け身は事故にあったときに使える	0.821									
25、受け身は普段の生活の中でも使える	0.803									
3、受け身は転んだときに使える	0.692									
16、受け身は身に付けておくと便利	0.611									
24、受け身は自然に体が動くようになる	0.578									
23、受け身は命を守る	0.575									
26、受け身はできていないと危険	0.534									
21、受け身は楽しい		0.704								
27、受け身は美しい・きれい		0.703								
17、受け身は相手の技をきれいに見せるもの		0.702								
30、受け身はカッコいい		0.681								
7、受け身は怖い			0.807							
5、受け身は痛そう			0.776							
18、受け身は難しい			0.612							
14、受け身は自分がどうやってとっているのか分からない			0.514							
13、受け身は恥ずかしい			0.452							
15、受け身は衝撃を和らげる				0.706						
8、受け身はけがを防ぐもの				0.672						
28、受け身はいざというときに使えるか不安				0.577						
1、受け身は体を守る				0.532						
20、受け身は目がまわる					-0.791					
22、受け身はコツをつかめばすぐできる					0.689					
19、受け身は練習したら上手くなる					0.461					
4、受け身は基本動作である						0.745				
6、受け身は準備運動することの一つである						0.589				
10、受け身はなくてはならない動作						0.472				
29、受け身は柔道が強くなるための一歩							0.716			
2、受け身は首を強くする								0.813		
12、受け身はたくさん種類がある									0.708	
11、受け身はストレス解消になる										
貢献量	3.929	2.714	2.652	2.522	1.891	1.809	1.675	1.524	1.460	20.176
貢献度 (%)	13.098	9.047	8.839	8.408	6.302	6.028	5.582	5.078	4.867	67.250
累積貢献度 (%)	13.098	22.145	30.984	39.392	45.694	51.722	57.304	62.383	67.250	

3. 各因子の男女間の比較

前記2 (柔道の受け身に対するイメージの構造)の因子分析の結果より、男子84名女子36名 (性別未回答4名は含まない)について、各因子の平均値を男女別に計算し、T検定を用いて男女間での差異を比較した。その結果、図2に示すように第2因子のみ

に5%水準で有意の差がみられ、その他の5つの因子については有意の差がみられなかった。(図-2)

第2因子は、『心理的プラス効果因子』で、4項目中3項目が“美”の観点から得られるプラス効果であった。平均値が女子群の方が僅かながら高いことから、女子は女性特有の美的感覚で受身に対するイメージを持っていると推測される。

図-2 抽出された因子間の平均値の差異の検定 (N=120)

因子	男子中学生(N=84)		女子中学生(N=36)		T-検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	3.067	1.378	3.177	1.083	t=0.207 df=118
2	2.644	1.150	2.862	1.061	t=0.041 df=118※
3	2.967	1.409	2.947	1.043	t=0.844
4	3.945	1.113	3.782	1.089	t=0.129
5	3.3	1.311	3.363	1.086	t=0.629
6	3.654	1.166	3.570	1.089	t=0.506

Note; ※P<0.05

V. 考 察(Discussion)

この結果、平均値から受け身のイメージを考察すると、肯定された項目5つからは、受け身の必要性を強く感じていると思われ、特に「(19) 受け身は練習したらうまくなる」、「(29) 受け身は柔道が強くなるための一歩」からは柔道の経験を通してその必要性や重要性が得られていると推測される。

逆に、得点の低い6項目に「(25)受け身は普段の生活のなかでも使える」が含まれていることから、受け身と日常生活を関連づけることができている生徒が多いと推測される。さらに「(3)受け身は転んだ時に使える」「(9)受け身は事故にあった時に使える」も低い得点を表していることが、それを強く印象付けている。

また、因子分析から受け身のイメージを考察すると、第1因子が『日常的効果因子』と解釈できることから、中学生が受け身についてまず頭に浮ぶのは、柔道の受け身は日常生活においても自身の身体や健康の保全につながるイメージであると推測される。

第2因子は『心理的プラス効果因子』であり、「(27)受け身は美しい・きれい」「(30)かっこいい」といった、見て感じたプラスの印象がそのまま受け身のイメージとして残っており、その印象は芸術的観点から捉えられていると思われる。また、受け身と投げ技は一体となっていることから、受け身のプラスイメージが柔道そのもののイメージ向上に貢献していると推測される。つまり、指導者は十分な指導力と確かな受

け身の技術を身につけ、学習者に魅せることにより、さらに生徒がもつプラスイメージを向上させることができるのではないかと考えられる。

第3因子の『心理的マイナス効果因子』は、柔道そのもののマイナスイメージの基盤となっていると思われる。その要素は、柔道における死亡事故や怪我等、危険性のあるものとして社会的にもマイナスイメージが植えつけられており、それらが生徒のマイナスイメージを導いていると考えられる。

第4因子の『身体的効果因子』からは、中学生が受け身に対し投げられた時に身体を守ってくれるイメージを持っていることが推測され、柔道の練習において受け身を習得する必要性を認識できていることがうかがえる。

第5因子の『体力的効果因子』は、受け身の体験を繰り返すことで、発見や理解を深める瞬間を得て、その技術を向上させていくものであると考えられる。そして、その瞬間を生徒自身が気づくことにより、さらに受け身の技術の向上につながるとともに、受け身に対する意欲も高まると考えることができる。

第6因子の『基礎的因子』は、柔道を始めるにあたって、受け身は基礎的な技術であるが、その重要性に関して柔道を行う上で決して怠ってはならない技術であると認識されていることが分かる。実際の教育現場でも指導者は受け身の重要性や必要性を生徒に伝え、生徒自身もそれらを理解していると考えられる。

VI. まとめ(Conclusions)

本研究では、平成24年度からの中学校武道必修化に向け、柔道の受身の単元をよりよい授業にするための基礎的資料を得ることを目的とし、中学生が持つ柔道の受け身に対するイメージについて検討した。

20答法(TST)、KJ法を用いて予備調査を行い30項目からなる質問用紙を作成し、中学生354名(経験者:267名、非経験者:87名)を対象に、柔道の受け身のイメージについて調査を行い、さらに平均値と標準偏差の算出と因子分析を行った。その結果、次の結論が得られた。

- 1) 各項目の得点の順序から、中学生は、柔道の経験を通して知り得た受身の本質を認識していながらも、それを日常生活と関連づけることができていない生徒が多い事が推測される。
- 2) 受け身のイメージは、解釈不能の3つの因子を除き、『日常的効果因子』『心理的プラス効果因子』『心理的マイナス効果因子』『身体的効果因子』『体力的効果因子』『基礎的因子』の6因子から構成されていた。投げられることへの恐怖感や、受け身の痛みから逃避観を持つ生徒が多いことが指摘されているが、本研究では、中学生は受け身に対し、その必要性や身体や健康の保全効果を認識

していることが示唆された。

また、感情的経験から来るイメージも強く、特に指導者の技術向上の必要性が明らかとなった。

3)現在の柔道について、柔道本来の目的である「人間形成」としての柔道ではなく、勝敗を重きに置いた「勝利至上主義」的な柔道であると思われる傾向。

本研究では、中学生全体を対象として行ったが、今後はさらに中学生の男女間、学年間、経験者非経験者間での比較・検討や、指導者と学習者のイメージから推測する受身に対する期待の比較など、より多くのデータを集め、平成24年度中学校武道必修化に寄与すべく努力したいと考える。

論文作成にあたっては、森脇保彦先生、中島多木先生、日本体育大学の藤田主一先生、電気通信大学の吉川和利先生にご指導いただき、また国士舘中学校、日本大学第三中学校、多摩中学校、栃木県結城東中学校、岡山県水島武道館にデータ収集の際に、アンケートにご協力していただき、貴重な資料を得ることができましたことに感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

なお、この論文の一部は国士舘大学体育学部武道学科の卒業論文に一部掲載させて頂きました。

〈 参考文献 〉

- 1) 本村清人 編著：「新しい柔道の授業づくり」大修館書店、p150, 2003.
- 2) 尾形敬史：「中学生の柔道に対するイメージについて」茨城大学教育実践研究、8, p.109～p120, 1989.
- 3) 森藤 才、貝瀬輝夫、菅原正明：「柔道の受け身における着床衝撃に関する研究」東京学芸大学紀要、第5部門、芸術・体育 42、p.87～94, 1990-10.
- 4) 真柄 浩、小林一敏、菅原秀二、小俣幸嗣：「衝撃力から見た柔道の受け身について」日本体育学会大会号(29)、329, 1978-12-17.
- 5) 真柄 浩、小林一敏、菅原秀二、小俣幸嗣：「身体部分の位相変化からみた柔道の後ろ受け身」日本体育学会大会号(30)、375, 1979-12-10.
- 6) 尾形敬史、沢畑好朗：「柔道の受け身指導に関する意識について」武道学研究、24-2, p.119-120, 1991.
- 7) Recharadson, A., (鬼沢 貞・浦野静雄訳)：「心像」紀伊国屋書店、pp.11-26 (Mentalimagery, Routlisdgeand Kagn Paull:London, 1969)
- 8) 猪俣公宏、伊藤政展、勝部篤美：「背泳の学習初期におけるモデル提示によるメンタル・トレーニング効果に関するフィールド研究—その方法論的試論—」体育学研究、24-2, p.101-108, 1979.
- 9) 伊東政展：「水泳技能の観察学習に関するフィールド・リサーチ」体育学研究24-4, p.291-299, 1980.
- 10) 西田 保、勝部篤美、猪俣公宏、小山 哲、岡沢祥訓、伊藤政展：「運動イメージの明瞭性に関する因子分析研究」体育学研究、26-3, p.189-205, 1981.
- 11) 鶴原清志、渡辺 章、中川 昭、荒木政信：「運動学習の領域における用語の問題(その2)」スポーツ心理学研究、8-1, p.48-50, 1972.
- 12) 奥野忠一、久米 均、芳賀敏郎、吉沢 正：「多変量解析法」日科技連出版社、p.323, 1983.
- 13) 松浦義行：「因子分析法」不昧堂、p.101-109, 1972.